

防疫指針がより明確に

～鳥インフルエンザの防疫指針改定～

「高病原性鳥インフルエンザ (HPAI) 及び低病原性鳥インフルエンザ (LPAI) に関する特定家畜伝染病防疫指針」が改定された (平成27年9月9日 農林水産省発表)。その内容には本病の防疫に対する国や都道府県が行うべき指針が記載されており、前回の指針をより明確かつ詳細に更新されたものになっている。

●基本方針と発生予察の監視

HPAI (高病原性鳥インフルエンザ) 及びLPAI (低病原性鳥インフルエンザ) の防疫対策を行ううえで、最も重要視すべきことは「発生の予防」と「早期の発見及び通報」、更には「迅速かつ的確な初動対応」である。

まず、発生を予察するための監視として、各都道府県の家畜保健衛生所数に3を乗じた戸数の農場を選定し、毎月1回の検査をする。その際に、定点モニタリング農場は、次のような感染リスクが高いと思われる場所を選定している。例えば、渡り鳥が休息・繁殖・集まるような湿地や、湖・池・河川等に近接している農場、野鳥が周辺で頻繁に確認される農場、あひる・かも類等の水きん類を飼養している農場などがある。

●異常家きん等の発見及び検査

家畜防疫員が家きん飼育農場の死亡羽数や簡易検査等で異常を認めた場合に、当該農場の家きん、家きん卵、敷料、飼料、排泄物等、家きん飼養器具の移動を制限している。ただし、GPセンター等で既に処理されていたものは除く。

また、各都道府県は、患畜または疑似患畜が確認された農場から半径3km以内の家きん飼養農場及び、そのほか、必要と認める者

に対して、発生農場の所在地を提供する。

発生農場における防疫措置については、早期封じ込めのために、所定の検査等で患畜または疑似患畜と判定したものは、24時間以内にと畜を完了し、72時間以内に焼埋却する。その場合、防疫措置従事者は、従事した日から少なくとも3日間は発生農場以外の鳥類に接触しないこととしている。



●疫学調査によるウイルスの浸潤状況の確認

下記、2つの場合に分けて疫学関連家きんにおけるウイルス浸潤状況を確認する。

(1) HPAIの場合：病性判定日から遡って21日以内に発生農場の衛生管理区域に出入りした人、物・車両が当該出入りした日から7日以内に他の農場等の衛生管理区域



に出入りした場合には、当該農場を疫学関連家きんとすることがある。

(2) LPAIの場合：発生農場における疫学調査の結果、病性判定日から遡って180日以内に患畜または疑似患畜と接触した家きんは疫学関連家きんとして移動を禁止し、臨床検査及び血清抗体検査を行うこととしている。

なお、病性判定日から遡って180日以内に発生農場の衛生管理区域に出入りした人、物・車両が当該出入りした日から7日以内に他の農場等の衛生管理区域に出入りした場合には、当該農場を疫学関連家きんとすることがある。

●農場監視プログラム

患畜または疑似患畜とは判定されなかったが、H5またはH7亜型のA型インフルエンザウイルスに特異的な抗体が確認された家きんを飼養する農場に対して、農場監視プログラムが適用される。

このプログラムは、飼養されている全ての家きんが処理された時点や、モニター家きん配置14日後及び28日後の臨床検査、ウイルス分離検査及び抗体検査の結果が陰性の場合に、適用が終了。

出典：「高病原性鳥インフルエンザ及び低病原性鳥インフルエンザに関する特定家畜伝染病防疫指針」(改定版/平成27年9月9日農林水産大臣公表)
http://www.maff.go.jp/j/syuan/douei/katiku_yobo/k_bousi/pdf/150909_hpai_guide.pdf

Topics

新種豚の開発

～ハイコープSPF種豚について～

JA全農グループでは、ハイコープSPF種豚の持つ強健で飼いやすいという特徴を残しつつ繁殖成績を大幅に改良した新種豚を開発した。本年より畜産サービスから本格供給を開始し平成29年度には切り替えが完了する。今回は新ハイコープSPF種豚を紹介する。

備えたランドレース種と大ヨークシャー種の作出に成功した。

JA全農飼料畜産中央研究所における新ハイコープSPF・F1♀種豚の繁殖成績は図2、3の通り。まだ5産次までの成績の比較だが、新ハイコープSPF種豚は従来ハイコープSPF種豚に比べ明らかな繁殖成績の改善効果が確認された。この成績から年間の離乳頭数を算出すると27.6頭となり、養豚先進国のヨーロッパと肩を並べる成績だ(図4)。

●SPF管理のメリット

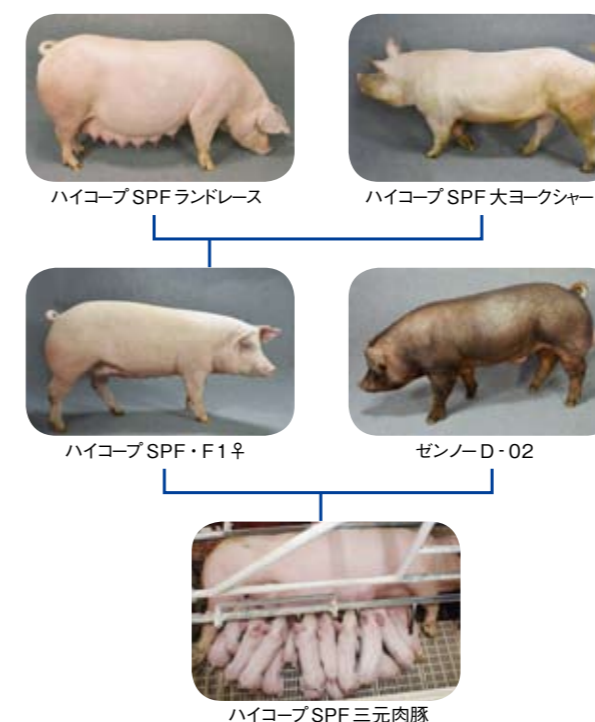
ハイコープSPF種豚の生産体系を構成する種豚場及びAIセンタ

ーは全て高度なSPF状態を維持している。SPF管理を行うことで特定疾病によるストレスや発育遅延などを防ぐことができ、豚が持つ本来の能力が発揮される。このことより、GGP・GP農場においては精度の高い検定や選抜が可能だ。各種豚場及びAIセンターはJA全農クリニックで定期的に衛生検査を実施し、その結果は全農畜産サービス株式会社のHPで公開している。

今後もよりよいハイコープSPF種豚をユーザーにお届けできるよう、JA全農グループ一丸となって取り組んでいく。

※ FIRE システム：個別別の正確な飼料摂取量と体重を計測可能な装置

図1.ハイコープSPF豚の交配組み合わせ



ハイコープSPF種豚場の定期衛生検査成績 <http://115.146.0.239/kensakekka/>

図2.ハイコープSPF・F1♀種豚 1腹総産子数の比較

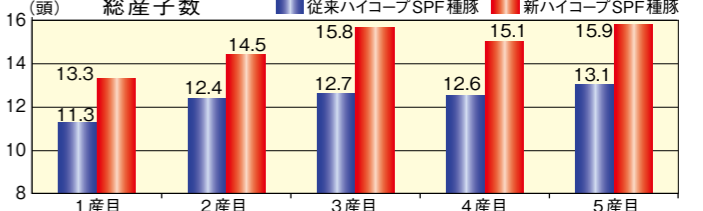


図3.ハイコープSPF・F1♀種豚 1腹離乳頭数の比較

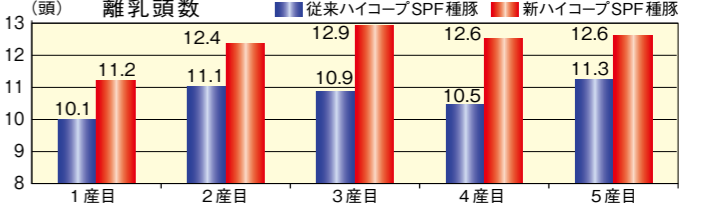
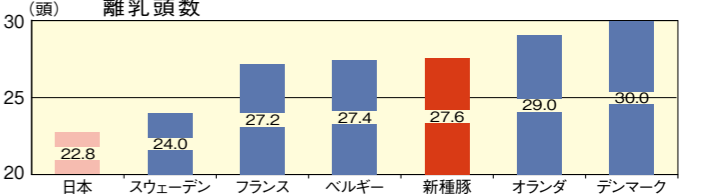


図4.海外の生産成績とハイコープSPF種豚(試算結果)との比較



出典：日本の数値は農林水産省「家畜改良目標」より(平成27年3月)

新種豚は全農飼料畜産中央研究データより試算

海外データはPig Cost of Production in Selected Countries. BPEX October 2013より